

3 説話 古本説話集

鳴く鹿への哀れみ



古文を味わううえで、まず押さえておくべきこと、今回の学習内容の「主語の把握」「語の省略」「助詞」「は」は、文法事項の順序をあえて無視してでも始めにやっておくべき重要なことである。

1 今いまは昔むかし、和泉式部いづみしきぶ、保昌やすまさに具くして丹後たんごへ下りたるに、「明日あす狩りかりせむ」とて、者ものども集つどひたる夜よさり、鹿しかのいたく鳴きたれば、「いで、あはれや。明日あす死しなむずれば、いたく鳴なく集つどまった夜よ半はん、

2 今いまは昔むかし、和泉式部いづみしきぶ、保昌やすまさに具くして丹後たんごへ下りたるに、「明日あす狩りかりせむ」とて、者ものども集つどひたる夜よさり、鹿しかのいたく鳴きたれば、「いで、あはれや。明日あす死しなむずれば、いたく鳴なく集つどまった夜よ半はん、

3 今いまは昔むかし、和泉式部いづみしきぶ、保昌やすまさに具くして丹後たんごへ下りたるに、「明日あす狩りかりせむ」とて、者ものども集つどひたる夜よさり、鹿しかのいたく鳴きたれば、「いで、あはれや。明日あす死しなむずれば、いたく鳴なく集つどまった夜よ半はん、

4 今いまは昔むかし、和泉式部いづみしきぶ、保昌やすまさに具くして丹後たんごへ下りたるに、「明日あす狩りかりせむ」とて、者ものども集つどひたる夜よさり、鹿しかのいたく鳴きたれば、「いで、あはれや。明日あす死しなむずれば、いたく鳴なく集つどまった夜よ半はん、

5 今いまは昔むかし、和泉式部いづみしきぶ、保昌やすまさに具くして丹後たんごへ下りたるに、「明日あす狩りかりせむ」とて、者ものども集つどひたる夜よさり、鹿しかのいたく鳴きたれば、「いで、あはれや。明日あす死しなむずれば、いたく鳴なく集つどまった夜よ半はん、

語注
和泉式部＝平安時代の歌人。大江雅致の娘。藤原道長の娘・彰子に仕えた。保昌＝藤原保昌。和泉式部をともしない、丹後国に国守として赴任。丹後＝丹後国。現在の京都府北部。

問一 文法 本文中の空欄①～④に、次の指示に従って「保昌」「和泉式部」のいずれかを書き入れよ。(2点×4)

① 動作主となる人物 ② 「言われた」人物
③ 「言った」人物 ④ 動作主となる人物

問二 文法 本文中の空欄A～Fに、次の指示に従って適切な語句を書き入れよ。(2点×6)

A 主格を示す助詞を補う B 文脈に合う体言を補う
C 目的格を示す助詞を補う D 主格を示す助詞を補う
E 目的格を示す助詞を補う F 助詞「の」を主格を示す助詞に改める

問三 内容 傍線部①を、次の傍線部に特に注意して現代語訳せよ。(8点)

鹿のいたく鳴きたれば

問四 内容 傍線部②・③の解釈として最も適当なものを選べ。(7点×2)

① そのように、あなた和泉式部が思いになるのであれば、私保昌は狩りをやめよう。
② そのように、あなた和泉式部が思いになったので、私保昌は狩りをやめるつもりだ。
③ そのように、あなた保昌が思いになったとしても、私和泉式部は狩りをやめることができない。
④ そのように、あなた保昌が思いになるのならば、あなたは狩りをやめてはどうだろうか。
⑤ 私和泉式部が、鹿の命を今夜限りだと思ふのならば。
⑥ 私和泉式部が、鹿の命を今夜限りだと思つたとしても。
⑦ 鹿が、もし自分の命が今夜限りだと思えば。
⑧ 鹿が、自分の命が今夜限りだと思ふと。

問五 読解 傍線部④とあるが、なぜ保昌は狩りをやめたのか。最も適当なものを選べ。(8点)

ア 和泉式部の考えに全て納得できないもの、ことを荒立てたくないと思つたから。
イ 鹿に同情する和泉式部の気持ちを理解し、またその時の歌をすばらしく感じたから。
ウ 狩りを諫めようとする和泉式部の振る舞いや歌によって、反省の思いが生じたから。
エ 鳴き声に哀れさを感じていた時に和泉式部の歌を聞き、狩りをする気が失せたから。

①主語・動作主というものを常に明らかにしながら読み進めること。

人物が明記されている箇所を参考に、会話のやりとりといった文脈をとらえて、読み誤らないようにする。

②言葉を補いながら読む習慣をつけること。

古文では、助詞の「が」「や」「を」、また体言が省略されている場合が多い。現代語訳で意味をつかもうとする時に、補うことを忘れないようにしたい。

③主格の格助詞「の」に注意する。

現代語では格助詞「の」は「～のもの」と、体言の代用(＝所有格)で用いられることが多い。だが、古文では「～が」と、主格を示す用法も多いので注意。

④接続助詞「ば」に注意する。

文中の「～ば」という表現について、現代語では「読めば、わかる」のように仮定を表すが、古文における接続助詞「ば」は次のように仮定条件と確定条件に使い分けられている。

◎未然形の語十ば
仮定 <…ならば…たら>

◎已然形の語十ば
確定 原因理由 <…ので>
偶然 <…と…ところ>
恒常 <…といつも>

問一 文脈から考えて①と②には同じ人物が入る。③には、歌を聞いたことによる動作を行った人物が入る。

問二 A・D 主格を示す助詞は基本「が」を考へる。本来主格を示す助詞ではない「は」も文によって入ることもある。

B 「時」か「こと」などの体言を考へる。
F 「の」は主格を示す場合が多いことに注意。

問三 主格を示す助詞「の」・已然形に接続する「ば」に注意する。

已然形+「ば」は、文脈によって適当な訳し方を考へる。

問四 ② 「思はば」の「は」が、どのように接続しているかに注意する。

③ 「思へば」の「ば」が、どのように接続しているかに注意する。

③思ふ	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
②思す	さ	し	す	す	せ	せ
①思ふ	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ